
書評

井川充雄，木村忠正編著

『入門メディア社会学』

(ミネルヴァ書房，2022年，A5判，272頁，2,800円＋税)

相模女子大学 木本玲一

Sagami Women's University Reiichi KIMOTO

メディアとは、一義的に定義するのが難しい概念である。狭義には個々の情報機器や様々なコンテンツを提供する産業などを意味するが、広義には言語や身体、さらには何らかの〈情報〉を媒介するものすべてがメディアであるともいえる。メディアを対象とした研究も幅広く、社会学、社会心理学、心理学、歴史学、政治学、哲学、美学、文学など、多くのディシプリンにまたがるかたちで進められてきた。

こうしたメディアをとりまく研究状況は、初学者を戸惑わせるものであると思われる。研究対象と研究の方法論が、つまり何をどのように研究するのか(しないのか)ということが、はっきりしないからだ。

本書はそうした混沌とした状況を照らす一筋の光となるかもしれない。本書の「はじめに」では、次のように書かれている。

本書は、縦軸にメディアの歴史的な変遷を置き、横軸にメディアの理論と方法や、現代社会における諸問題を配置した。これによって「メディア社会学」をこれから学ぼうとする人にとって、でき

るだけ網羅的に学習することができるように意図した(v)。

こうした志向は、「メディア社会学の歴史的視点(第1章～第5章)」、「メディア社会学の理論と方法(第6章～第9章)」、「メディア社会学の現代的展開(第10章～第14章)」という3部構成によっても表現されている。まずは各章の内容をみていきたい。

第1章では人類史における3つの「コミュニケーション革命」、すなわち「第一のコミュニケーション革命」(文字)、「第二のコミュニケーション革命」(印刷)、「第三のコミュニケーション革命」(インターネット)の意義が論じられている。第2章では、明治以降の日本における新聞を中心としたジャーナリズムの発展と、それらに対する学術的アプローチ(新聞学、ジャーナリズム論)が紹介されている。第3章では、第一次大戦期、第二次大戦期、朝鮮戦争期におけるラジオが取り上げられ、関連するプロパガンダ研究が紹介されている。第4章ではテレビの歴史が取り上げられ、マスコミュニケーション研究のなかでも、効果研

究の展開が整理されている。第5章では、インターネットが取り上げられ、広範な対象を捉えるメディア社会学的な枠組み（技術決定論と社会決定論）が示されるとともに、「デジタルネイティブ」という観点からの議論がすすめられている。第6章ではマスコミュニケーション研究のなかでも特にオーディエンス研究の学説史が整理されている。第7章では、様々な社会的相互行為について、ミード以来の社会心理学的議論が紹介されている。第8章では「儀礼」概念をメディア論的に展開させたものとして、メディア・イベント論が紹介されている。第9章ではメディアを対象とした量的、質的な調査、研究の方法論が紹介されている。第10章では「音楽[を伝える]メディア」、「音楽[という]メディア」という視点から、音楽をめぐるメディア環境や、メディアとしての音楽の様態に目が向けられている。第11章ではジェンダー論の視点から女性やLGBTQに対するメディア表象の偏りや、産業における不平等が取り上げられている。第12章では情報技術の進展が苦役に等しい「労働」と自己実現につながる「仕事」のありかたをいかに変化させるのかが特に飲食業

を事例に考察されている。第13章では地域メディアの歴史を整理しつつ、ソーシャルメディアが既存の地域のコミュニティを再構築し、人々をつなぎ直す可能性が示されている。第14章ではAIやサイボーグなどの先端技術が社会に実装される際の倫理的な問題について議論されている。

以上、ごく簡単にまとめたが、それでも本書が非常に多様で広い領域にまたがっていることが分かる。このことは、初学者がなるべく網羅的に学習できるようにという本書の企画意図によるものであろう。読み手は参考文献などをたどりながら、各自が関心のある領域をさらに深めていくこともできる。欲をいえば、映画やアニメ、ゲームなどの、近年研究が進みつつある領域が扱われていても良いように思えたが、これは評者のないものねだりであろう。

ともかく本書はメディアに関連するかなり広い領域に目配りがされている。そのような点からも、様々な興味関心のある学生が混在する大学の演習やゼミなどで、テキストとして利用するのに適した本なのではないだろうか。